

## 天からの贈り物

年の瀬の忙しい時に、田舎の弟から段ボール箱が届いた。実家は両親が他界し、空き家になっていたが、遺品整理中に懐かしい品々やアルバムが見つかったという。早速、開けてみると、なんと、小学校1年青組の通信簿が出て来た。「大変良い」の欄に意外と○が多いので、母親は嬉しくて大事に残したのだろうか。次に出て来たアルバムは表紙が汚れ、頁をめくる度に台紙が外れ、埃が舞う厄介な代物だ。ご先祖様らしい写真が多いが説明が無いので、自分との繋がりが分からない。惜しいなと思っているうちに、びっくりする写真が出て来た。母親に抱かれた、丸々した赤ちゃんだ。メモの年代から紛れもなく私の1歳の時の写真だ。私の生まれは朝鮮だが、子供の頃の写真と言え、富士山麓の小学校に入学した時の集合記念写真しかなかったもので、これは海を隔てた空白の時間を埋める、そして私のルーツを示す貴重な写真だ。まさに、天から届いた贈り物の気がした。しかし、感慨に耽る間もなく、いろんな疑問が浮かんで来た。私は何故、朝鮮で生まれたのか。祖父が朝鮮の京城（現在のソウル）で果樹園を営んでいた話は聞いていたが、何故本籍の富山を離れ、朝鮮に渡ったのか。父は北海道帝国大学に在学中、彼女（母）に巡り会い、卒業と同時に朝鮮に連れて帰り結婚したらしいが、男女交際が厳しく制限されていたはずの札幌でどんな出会いがあったのだろうか。私は太平洋戦争が勃発した翌年の昭和17年に朝鮮で生まれたが、ガダルカナル島で大敗を喫し、悲惨な結果への道を歩み始めた年である。その当時、両親はどんな暮らしをしていたのか等々。聞きたいことは山ほどあるが、今となっては後の祭りだ。いずれにしても、終戦後、無一文のまま日本に引き揚

げ、4人の子供を抱えながら、安住と定職を求める苦難の人生が始まったのは間違いない。私も両親の苦勞と共に生き抜いて来たように思う。それだけに、自分の子供達には平穩な生活をとっていたが、両親とは別の想定外の苦勞を背負う事になってしまった。思いもよらない天からの贈り物に対し、傘寿を過ぎても恩に報いる報告が出来ないのは残念だ。せいぜい両親より長生きし、子供達の心の支えになればと思うばかりである。

ところで、令和6年は辰年。辰は龍を表わすという。子供の頃、稲の切株が残る田んぼで迷惑も顧みず、よく凧あげをして遊んだものだ。その凧の背中には「龍」の字が書かれることが多い。あまり意味を考えた事が無かったが、勢いよく天高く昇れという意味が込められていたのだと今にして思う。辰年には当事者家族が勇気を貰えるような四文字熟語や慣用句は少ないが、龍の文字入りで、現在最も期待の大きいのは「龍ヶ崎地方家族会」だろう。念願の「マル福」適用範囲拡大の道筋が見えて来た。是非「龍頭蛇尾」に終わることなく、更に具体化が進む展望の明るい「登龍門」の年になる事を祈りたい。 (K・M)